泣いたっていいじゃん

大橋　秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泣いたっていいじゃん

【Ｎコード】
Ｎ７３３８Ｊ

【作者名】
大橋　秀人

【あらすじ】
恋愛のほろ苦い気分を味わいたい方へ

愛美から連絡が来るのを待っている自分がいる。
時男はバカバカしくなってケータイをベッドの上へ放った。
深夜一時。
テレビを大音量にしてお笑い番組を見る。
馬鹿みたいに笑い声を上げてみる。
ポテトチップスを口いっぱい頬張り、それをコーラで流し込む。
早く風呂に入って眠らなくてはならない。
明日も仕事だ。
でも、なんだか立ち上がる気が起きない。
時男は震えないケータイを見る。
手を伸ばし、電池の残量を確認する――――　一つも減っていない。
アンテナは――――バリサンだ。
今日、愛美は亮の所へいったはずだ。
昨夜あれほど勢いづいて、別れ話をすると息巻いていたのだから。
亮との話が済んで、安心して眠ってしまったのだろうか。
必ず連絡するといったのに。
深夜三時。
時男は眠れない夜を過ごす。

「やり直すって決めたよ」
電話越しの愛美の声は甘く、浮かれていた。
「もう絶対に浮気はしないって言ってくれたの」
時男は眠い目を擦る。
深夜二時。
「もう、お前だけだって」
「そっか・・・」

時男はすでにベッドに入り、目を瞑って話している。
「丸く収まったならよかったじゃん」
「うん、ありがと」
受話器の向こうの無邪気な声からは眠気が感じられない。
昨夜はぐっすり寝たのだろう。
きっと亮の腕の中で・・・。
「いつもごめんね」
「いいって」
「時男君が相談に乗ってくれてとっても助かってるよ」
「そっか」
「今度、なにかお礼させて」
愛美の湿気を含んだ声に、時男は思わず息を飲む。
「いいよ」
と呟きながらも、瞼の裏に愛美の唇を思い浮かべてしまう。
グロスを塗った艶やかで厚ぼったく、いかにも柔らかそうな唇を。
「また何かあったら電話してきなよ」
そして、そんなことを言ってしまう。
相談になど乗りたくないのに。
「わかった。ありがと」
電話越しに微笑む愛美の顔が浮かぶ。
「また掛けるね」
漸く電話は切れた。
真っ暗闇の中で薄目を開け、眩しげにケータイの時刻を見る。
午前四時。
ベッドに潜り込みきつく目を瞑るが、一向に眠りは訪れなかった。

「お前、絶対にバレるなよ」
時男の切実な眼差しにも、亮は悪びれず、
「君には関係ないっしょ」

と笑う。
隣にいた女は興味がないという風にそっぽを向き、煙草をふかし始めた。
「なに堂々と手を繋いで歩いてんだよ」
時男は亮を女と引き離し、小声でも語気を強める。
「なんで？」
フヌケた声を上げる亮は振り返り、ヘラヘラと女に手を振ってみせる。
「昨日、もう絶対に浮気はしないって言ったそうじゃないか」
彫りの深いソース顔が弾けて、
「よく知ってるね」
と本気で感心する亮に時男はうんざりして、
「浮気するなとはもう言わない。でも、愛美に見付かるようにはするな」
と忠告する。
「愛美をこれ以上悲しませないでくれ」
時男がそう呟くのを聞き逃さず、
「何？　お前もしかして愛美に気があんの？」
と亮は可笑しそうに訊く。
「そんなんじゃない」
「じゃあ、なんでそんなにムキになるんだよ」
「ムキになんかなってない」
お前のその、ヘラヘラした態度が気に食わないだけだ。
時男はそう言ってやりたかった。
「だよな、あんな女の為にムキになることなんてないぞ？」
時男の肩に手を置き、亮は顔を近づける。
「あの女、結構しつこいところがあってな。こっちが寝てる時間に何度も電話を寄越して、出なかったら出なかったで、やれどこに行ってただの、やれ何してただの根掘り葉掘り訊いてきて、いい加減ちょっとヒキ気味なんだよね」

亮はそう言って苦虫を噛み潰したような顔をしてみせる。
いい男は、しかめっ面をしてもいい男だ。
亮は確かに、男の時男が見ても綺麗だと形容できる顔立ちだった。
「もうそろそろ潮時かもな」
遠くにいる女を見て亮が何気なく呟く。
「潮時ってなんだよ」
時男は亮を睨み付けた。
「潮時の意味、わかんない？」
「愛美は昨日、やり直すって言ってた」
時男の真剣な言葉に、亮はヘラヘラと笑う。
そして、
「時男君ってさぁ、なかなか格好いいよね」
と時男の顔を覗き込んだ。
「まあ、こっちのことはこっちでなんとかするからさ」
時男がたじろいでいると亮は振り返り、遠くで待つ、気のない風の女に大きく手を振った。
「その後は君に任せよう。応援してやるよ、君の恋」
去っていく亮の後姿を追いながら、時男はその場に立ち尽くした。

午前三時。
「亮に別れようって言われた」
時男が電話に出ると、愛美は唐突にそう告げた。
既に泣き散らして落ち着いた様子で、でもどこか棘のある語気がケータイの向こうから伝わってくる。
「そっか・・・」
「今日、会ったんだって？」
「ああ、偶然だけどね」
時男は息を呑み、受話器の向こうの様子を探る。

微かに愛美の息遣いだけが聞こえてくる。
「亮、誰かと一緒にいた？」
「・・・うん」
「時男君、亮と何か話した？」
「ちょっとね」
「亮に何か言った？」
「・・・うん」
「・・・時男君、私のこと、好きなの？」
「・・・ああ」
涙の流れる音。
それ以外、何も聞こえない。
「ごめんなさい」
暫らくして愛美は言う。
時男は愛美の頬を伝う涙を思い浮かべる。
愛美は一体、今、何に対して涙を流しているのか。
「謝られても困るな」
暗闇の中で、時男は自分の歪んだ顔を思い起こす。
亮ほど絵にならない不恰好な顔に、苦く笑うしかない。
「泣いてばかりでごめんね」
「いいよ」
好きな人には、いくらでも優しくなれた。
「泣いたっていいじゃん」
それは半ば自分に向けられた言葉だった。
「いっぱい泣いて、あんな奴、早く忘れちゃいなよ」
受話器の向こうで啜り泣く愛美がいる。
そして、愛美を勇気付け、泣くに泣けない時男がいる。
「きっとすぐにいい人が見つかるよ」
涙を呑んで時男は言う。
「時男君、ありがと」
「・・・ああ」

「いろいろごめんね」
「いいって」
「時男君っていい人だよね」
少し語気を明るくして愛美は言う。
時男は一つも嬉しくない褒め言葉に、
「ありがと」
と苦笑するしかない。
「ねえ、また電話してもいい？」
「もちろん」
勿論、時男はそう答える。
そして、
「じゃあ、今夜はゆっくり休んで」
と意味のないことを口走ってしまう。
「時男君ってほんとに優しいよね」
最後まで愛美は時男を褒め倒した。

ケータイを置くと、時男は悲しい褒め言葉たちの棘の痛みに、暫らく耐えなければならなかった。
午前五時。
夜が明け始め、小鳥の囀りが窓の向こうから聞こえてくる。
「俺は男だ」
男らしい男だと自負している時男は、天井に向かってそう呟いてみる。
朝日に赤く染まった天井は、やけに滲んで模様も見えない。
「男だって、泣いたっていいじゃん」
愛美が好きだった。
「泣いたっていいじゃん」
瞼から溢れた涙は、時男の目じりから止め処なく流れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7338j/

泣いたっていいじゃん

2010年10月10日03時46分発行